



遠13
2378
169

天保元年

御詔昏島廻序

好文堂

いづへの蒙古高勾麗むらぐくと起るも日本と攻んとく
 神風ふ吹きたるに鮮の浦の土左衛門とらう。ころり往生せし
 より以来日本の物とらうて尾を垂前里をかめて降糸せしも
 神國の切汗はがもるささるるもや。是皆伊勢の井の撥鬢奴豆
 府の唐天竺三東西南蠻とらふ北狄まで。日本の本の大根あるふ摺
 おろしきいそみかきもるく治む。時津風四海に浪あつたるに
 船漕いづて朝比奈の三郎か島廻りの後草紙の事ありたきども
 今も是と當世の替島に織ると正月の暗着とらま卓とらるぬ

十返舎一九志

昏島廻

壹

十返舎一九著

吾峠延
 十返舎一九著
 吾峠延
 十返舎一九著
 吾峠延
 十返舎一九著



吾峠延
 十返舎一九著
 吾峠延
 十返舎一九著
 吾峠延
 十返舎一九著



板元
重

下

文藝圖式



十編舎一九箸好文章

年々業々織生を替嶋おろる中ふ八丈糸のよきうへむら
今の三丈糸の流りし猫も扱ふもあへて
忌辰刻ふ唐國までまこまらぬ望ふ蟬蛸
はひておろし替生を替嶋おろる中ふ八丈糸のよきうへむら
書換永壽堂の角織
出陣文よまらせそとを
夏すも委てあけ
まへんとすの高ひの
おは名をもまらふ
向ひて筆をばむ

香島四二編

三伏駄

えびのひと
このひと
はのひと
してのひと
あつきのひと
うごきのひと
本あつきのひと
あつきのひと
のせまのひと
うごきのひと
えびのひと
うごきのひと



うごきのひと
あつきのひと
えびのひと
うごきのひと

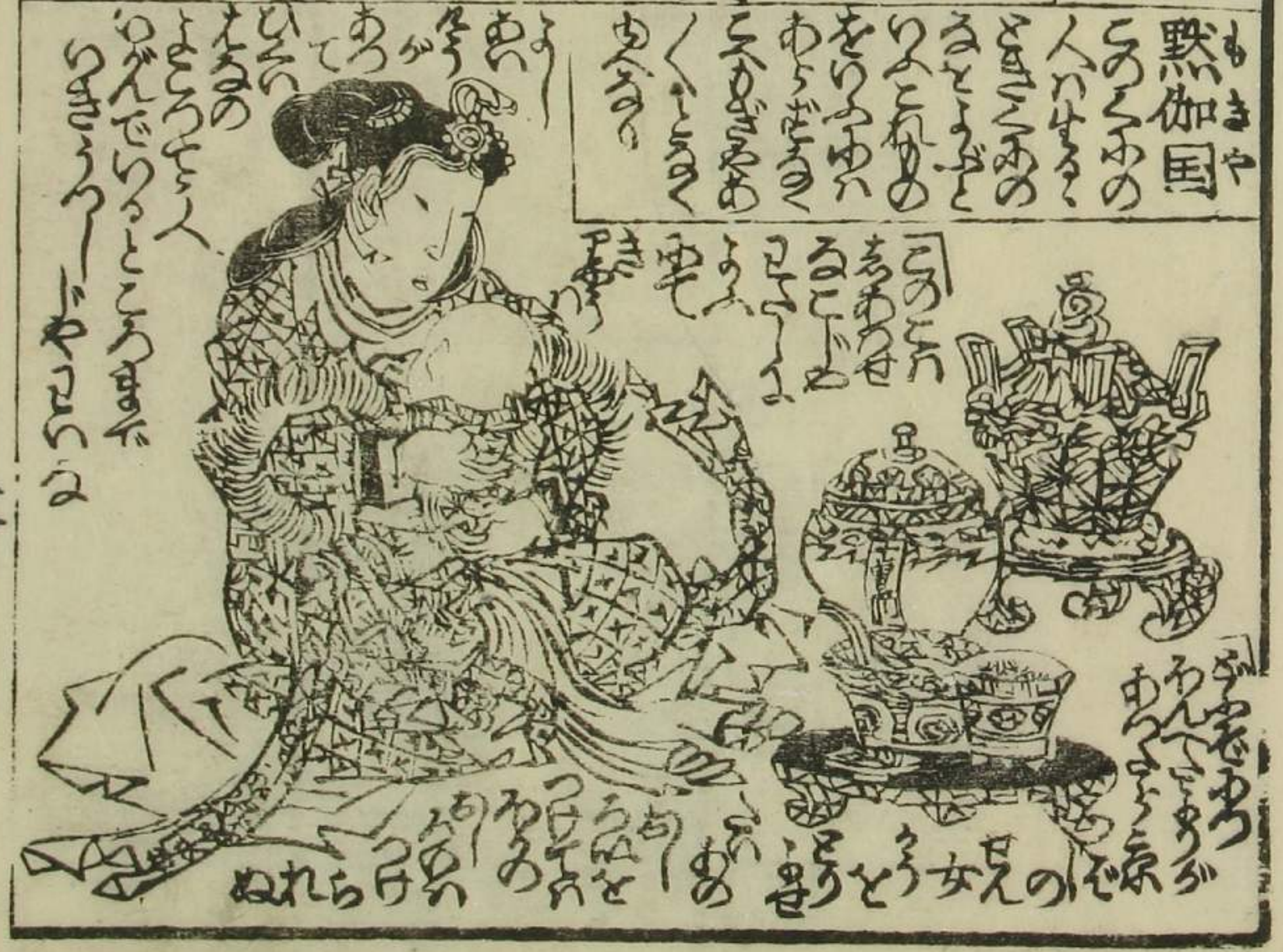
扶桑国

このひと
あつきのひと
えびのひと
うごきのひと



黙如国

このひと
あつきのひと
えびのひと
うごきのひと



このひと
あつきのひと
えびのひと
うごきのひと

眉路骨国

この国は女の
あひだに
この女は
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ



おれは
きこ
のち
このこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ

この
あひだ
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ

無腹国

この国の人
あひだに
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ



この国は
あひだに
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ

鹿鹿羅

この国は
あひだに
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ



この国は
あひだに
まふとち
トんのこ
ちこのこ
のここの
てこのこ
つこのこ
つこのこ
つこのこ

五溪蠻

ごせの蛮
これぞあつちの蛮
あつちの蛮は日本のかく
つちの蛮



鳥伏部

このふれは
鳥のふれは
鳥のふれは

女慕国

女慕国
女慕国は
女慕国は

女慕国
女慕国は
女慕国は



女慕国
女慕国は
女慕国は

老樹国

老樹の国は、
 老樹の木の葉を
 食する。木の葉は
 木の葉の味を
 食する。木の葉は
 木の葉の味を
 食する。木の葉は



琶牛

琶牛の国は、
 琶牛の皮を
 食する。琶牛の皮は
 琶牛の皮の味を
 食する。琶牛の皮は



頓孫

頓孫の国は、
 頓孫の人の顔を
 食する。頓孫の人は
 頓孫の人の顔を
 食する。頓孫の人は



一目国

一目国の人は、
 一目の目を
 食する。一目の目は
 一目の目の味を
 食する。一目の目は





文蔵廿武部正百人十外

